

# キリシタン・ローマ字文献のウ段長音の表記について

千葉 軒 士

## 1. 問題の所在

従来、キリシタン・ローマ字文献では、ウ段長音は **u** の上にアセント符号  $\acute{}$  を付すことで示すものと考えられてきた。<sup>(注1)</sup> 土井・森田 (1975) では、以下のように記す。

ウ段の長音は、イ段・ウ段の音節に母音 **u** の続いた **iu**・**uu** が変化して生じたもので、キリシタンはこれを **û** で写している。

**u u**・・・食ふ (**cû**) 吸ふ (**sû**) 緩う (**nurû**) 空 (**cû**) 通 (**tçû**)  
**i u**・・・言ふ (**yû**) 新しう (**ataraxû**) 流 (**riû**) 商人 (**aqiûdo**)  
(p.99 本文縦書き)

これに従えば、ウ段長音の表記は **u** に  $\acute{}$  を付すことで示していたと即断してしまうが、そうではない。キリシタン・ローマ字文献の版本では、 $\acute{}$  や  $\grave{}$  もウ段長音対応箇所<sup>(注2)</sup>に付される。では、なぜウ段長音を示す際の表記は一つに限定されなかったのか。本稿では、キリシタン・ローマ字文献の版本諸本を精査し、キリシタン文献におけるウ段長音を記す際の方針及び方法がどのようなものであったかを探る。

ここで、そもそもキリシタン・ローマ字文献の版本諸本でウ段長音がどのように記されていたのかを確認する。下記の表1では、キリシタン・ローマ字文献の版本諸本における **û** と **û** の総数を提示する。

・表1 キリシタン・ローマ字文献版本における **û**・**û** の使用総数<sup>(注2)</sup>

|                   | <b>û</b> | <b>û</b> |
|-------------------|----------|----------|
| サントスのご作業 (1591)   | 1418     | 8        |
| ヒイデスの導師 (1592)    | 1343     | 3        |
| ドチリナ・キリシタン (1592) | 184      | 0        |
| 天草版平家物語 (1592)    | 1556     | 0        |
| 伊曾保物語 (1593)      | 474      | 0        |
| 金句集 (1593)        | 26       | 0        |

|                   |      |    |
|-------------------|------|----|
| コンテムツス・ムンヂ (1596) | 680  | 0  |
| ドチリナ・キリシタン (1600) | 92   | 0  |
| スピリツアル修行 (1607)   | 1195 | 54 |

表1で示す  $\ddot{u}$  と  $\hat{u}$  の例は、ともにすべてウ段長音と対応する箇所では用いられている。土井・森田 (1975) の指摘のように、キリシタン・ローマ字文献の版本諸本では、ウ段長音の対応箇所に主として  $\check{u}$  を用いている。ただ  $\hat{u}$  も「サントスのご作業」では同一文献内のウ段長音対応箇所全体の 0.5%、「ヒイデスの導師」でも 0.2% とわずかに用いられ、また「スピリツアル修行」では 4.3% とわずかとは言い切れない使用数を確認することができる。この、ウ段長音の対応箇所に 2つのアセント符号が併用されるという、一見無駄とも思われる所作に対して、森田 (1993) ではこの  $u$  に  $\wedge$  が付されることを以下のように記している。

$\hat{u}$  は、日葡辞書以前から用いられ、サントスの御作業 (I 75/3, II 234/1) や信心録 (253/9, 474/6) にも見られ、日葡辞書以後でも「サカラメンタ提要」付録にも見られるから、一般的な  $\ddot{u}$  にまじって使われたのである。(p.169)

森田はこの例を‘まじって使われた’とする。しかし、キリシタン・ローマ字文献の最初の作品「サントスのご作業」を中心に  $\hat{u}$  を詳細に見ていくと、この例が単に混用されたものだけではないことがわかる。この‘まじって使われた’とされてきた  $\hat{u}$  を詳細に検討していくことで、キリシタン・ローマ字文献を作成していく際のウ段長音を明示する方針がどのようなものであったかを以下考察していく。

## 2. 「サントスのご作業」の $\hat{u}$

「サントスのご作業」で使用される  $\hat{u}$  は 8 例である。以下に示す。

toy $\hat{u}$  (という) 巻1 75-03                      ningi $\hat{u}$ ni (人数に) 巻2 72-12  
Dai j $\hat{u}$  (第十) 巻2 234-01                      Dai j $\hat{u}$  (第十) 巻2 246-01  
Dai nij $\hat{u}$  (第二十) 巻2 289-01                      toy $\hat{u}$  (という) 巻2 289-02  
Dai nij $\hat{u}$ ni .Perfia to y $\hat{u}$  (第二十二 Perfia という) 巻2 305-06

この中で、巻2の72-12の ningi $\hat{u}$  (人数) のみが本文で使用される  $\hat{u}$  であるが、残りの7例はタイトルを記すために用いられた本文よりポイントの大きい活字を使

用している。<sup>(註3)</sup> ûはこのように異なる2つの環境で用いられる。この異なる環境に表れる ûについて、別々に検討する。

## 2. 1 タイトルに用いられる û

まず、タイトルに用いられる7例について考察する。ここでなぜ û が用いられたのかを考えるためには、ûを見ていくだけではなく、そもそもここではウ段長音に対応する語にゝが付されていないという事実から問題を検討していく必要がある。富永(1978)では、以下のように記す。

アクセント付文字は、概むアクセント付のままの一文字として作成されており、文字とアクセントとを別々に接合したものではないらしいが、間々アクセントのずれらしきものが見受けられる。(p.83)

富永はこのように記述する。ただ、なぜこのように‘一文字として作成され’たと判断できるのか、その根拠は明示していない。富永も指摘するように、アクセント符号とずれたものや、文字とアクセント符号が接するものなどが当該文献には散見しており、一括であったとみなすことが難しい例もある。ただ、これが一括でなかったと積極的に主張するのもまた難しい。この点に関して、一括された活字が制作されていたかを十分に精査する必要があるが、本稿では、タイトル用の活字に関してはアクセント符号と一括であったという立場で論を展開する。というのも、後述するが(5節)、これが別の活字であったとみなすことには無理が生じるためである。

以下に、まず「サントスのご作業」でタイトルが付される丁を示す。

・タイトルが付される丁

巻1 1, 12, 45, 64, 75, 95, 113, 122, 126, 133, 140, 150, 164, 173, 206, 239, 275, 294

巻2 1, 3, 43, 61, 86, 109, 141, 148, 160, 169, 170, 192, 202, 208, 218, 226, 234, 246,  
289, 305, 310, 322, 332, 340

(下線は û が用いられる丁)

このタイトルが記される丁のうち、ウ段長音に対応する語句を含む丁は以下の丁である。

・ウ段長音に対応する語句を含む丁

巻1 75

巻2 61, 86, 160, 208, 234, 246, 289, 305, 310, 315, 322, 332

そこで、上に示したウ段長音に対応する語句を含みながらも *û* を使用せずにそれを表記している丁について、その表記のされ方を表 2 で示す。

・表 2 ウ段長音対応箇所表記のされ方

| 丁数      | ウ段長音対応箇所の表記のされ方                         |
|---------|---|
| 巻 2 61  | ウ段長音対応箇所 (TOYV (といふ)) はあるが、アセント符号が付されない |
| 巻 2 86  | ウ段長音対応箇所 (TOYV (といふ)) はあるが、アセント符号が付されない |
| 巻 2 160 | ウ段長音対応箇所 (toyu (といふ)) はあるが、アセント符号が付されない |
| 巻 2 208 | ウ段長音対応箇所 (ju (十)) はあるが、アセント符号が付されない     |
| 巻 2 310 | ウ段長音対応箇所 (ju (十)) はあるが、アセント符号が付されない     |
| 巻 2 315 | ウ段長音対応箇所 (ju (十)) はあるが、アセント符号が付されない     |
| 巻 2 322 | ウ段長音対応箇所 (ju (十)) はあるが、アセント符号が付されない     |
| 巻 2 332 | ウ段長音対応箇所 (ju (十)) はあるが、アセント符号が付されない     |

表 2 の各丁の様相について述べていこう。まず巻 2 の 61 と 86 の例であるが、ここでは大文字が用いられている。以下に示す。

### TOYV (といふ)「サントスのご作業」巻 2 61-05

キリシタン版で用いられる活字について詳細な調査をした富永(1978)にある活字表では、キリシタン文献ローマ字本のローマ字の大文字の V に <sup>^</sup>か<sup>ˇ</sup> を付したものは見当たらない。<sup>(註1)</sup>これに従えば、キリシタン版でそもそも大文字の V に <sup>^</sup>と<sup>ˇ</sup> を付さないのは、この例が大文字であったためであると見ることができる。

残りの例はタイトルに付された *û* と同様に、小文字かつ同ポイントの活字を利用している。ここでは *û* の活字は使われていない。以下に示す。

### toyu (といふ)「サントスのご作業」巻 2 160-02

このように、ここではアセント符号が付されない。そもそも <sup>ˇ</sup> というアセント符号についてポルトガル語の側から当時の正書法などを精査した丸山(1988)は、この符号を外国語記述のために新鑄されたものとしている。丸山がこのように指摘するのは、16 世紀のポルトガル語の正書法などの文献で、この <sup>ˇ</sup> が用いられないことにある。つまりここから、日本語のオ段開長音やウ段長音を示す際に用いられた <sup>ˇ</sup> はもともとポルトガル語で使われていなかったために、このアセント符号を併せ

持った活字が新たに作られた可能性がうかがわれる<sup>(註5)</sup>。もちろんˇが付されたuやoが確認できるように、最も多用される本文用の活字は新たに作ったのであろうが、使用頻度の高くないタイトル用の大きいポイントのüはこの段階で制作されていなかったのではないか。つまり、1591年に刊行された「サントスのご作業」が、キリシタン・ローマ字文献の最初の印刷物であるために、タイトルでüが使用されなかったのではなかろうか。そこで1592年刊行の「ヒイデスの導師」を見てみよう。以下に「ヒイデスの導師」において、タイトルが記されている丁でウ段長音に対応する箇所を含む語が用いられる箇所を以下に示す。

・「ヒイデスの導師」でタイトルが付される丁でウ段長音対応箇所がある丁  
90, 120, 128, 146, 150, 154, 157, 161, 168, 186, 193, 220, 226, 229, 267, 286, 295, 306,  
323, 331, 343, 350, 356, 421, 469, 474, 478, 484, 492, 511, 520, 522, 540, 549, 556  
(計35丁)

上記の丁では、以下のようにウ段長音対応箇所にˇがすべて付されている。

**nijū** (二十)「ヒイデスの導師」90-11

ここではタイトル用のポイントの大きい活字にもüが使用されている。このように考えると、「サントスのご作業」では用いられていなかった大きいポイントのüが、「ヒイデスの導師」が作成された段階では利用されていることがわかる。このことから「サントスのご作業」の段階ではタイトル用のüの活字がまだ制作されていなかった可能性が浮かぶ。そのために、ûもしくはアセント符号を付さないuでウ段長音対応箇所に置いたのではないか。

この活字の状況は、タイトルの付されるオ段開長音対応箇所の例を見るとさらに明確となる。キリシタン・ローマ字文献では、オ段開長音対応箇所の母音のoの上にˆを付す。ただ「サントスのご作業」では、タイトル用のポイントのoの使用例は1例もない。また、以下のように、タイトルにおいてオ段開長音対応箇所を含む語にˆが付された例を1例確認することができる。

**yōdai** (様体)「サントスのご作業」巻1 122-02

このように、オ段開長音対応箇所にˆを用いた例がある。キリシタン・ローマ字

文献では、オ段長音対応箇所の子音の *o* の上に <sup>^</sup> が付される。本文では *yôdai* とした例は 14 例用いられており、*yôdai* とした例が確認できない。このように本文で *yôdai* と正確にオ段長音の開合を分けているのに、タイトルの箇所ではなぜか <sup>^</sup> が用いられている。また、同じタイトル用のポイントの文字で用いられるオ段開長音対応箇所を含む語の使用は 5 例あり、その内の 2 例は以下のように表れる。

*yò* (様) 卷 1 113-05      *gofòbai* (ご傍輩) 卷 2 246-02

ここでは <sup>˘</sup> が用いられている。<sup>˘</sup> は本語で何らかの機能と対応させるために用いたアセント符号であろうが、その <sup>˘</sup> が <sup>˘</sup> で示しえたオ段開長音対応箇所で使用されることは、偶然とは考えにくい。また残りの 3 例は、巻 2 の 148 の *yodai* (様体)、289 の *teiuo* (帝王)、305 の *acuuo* (悪王) と記されており、ここではアセント符号が付されていない。ここから、やはりタイトルという使用頻度の少ない箇所では <sup>˘</sup> を併せ持った活字が制作されていなかったと考えられよう。

ここで用いられた <sup>^</sup> と <sup>˘</sup> は活字の無かった <sup>˘</sup> の代用であったことが強く推定される。タイトル用ポイントのウ段長音及びオ段開長音の対応箇所すべてで <sup>˘</sup> が用いられず、<sup>^</sup> と <sup>˘</sup> が用いられることは偶然ではないだろう。

## 2. 2 本文中の *û*

ここまでタイトル用の文字に注目してきたが、ここでは本文で用いられた巻 2 の 72-12 の例について述べよう。「サントスのご作業」では、ウ段長音対応箇所に主として *û* が用いられていることは確認した。本文にいたっては、この 1 例のみが *û* で示されたウ段長音対応箇所である。ここで、この箇所で <sup>^</sup> を付したことに何らかの意図を確認できるか検討するために、この *û* が用いられる丁でウ段長音対応箇所をどのように記しているのか、また同じ語がこの当該文献でどのように記されたかを確認しよう。前者はこの丁を組んだ植字工がウ段長音対応箇所をどのように表示しようとしたのかを、後者はこの語に特別な意図が含まれているものかを検討するものである。まず、この *û* の用いられる巻 2 の 72 丁にはウ段長音対応箇所に *û* を用いた語が 1 例 (72-11, *jiyû* (自由)) 確認できる。また、この *ningiû* と符号が異なる *ningiü* の例は巻 1 に 2 例、巻 2 に 1 例あり、この語のみに対して何か特別な機能を示そうとして <sup>^</sup> を用いたとは考えられない。この <sup>^</sup> は単なる誤りとみるべき

なのであろうか。

### 3. 「ヒイデスの導師」の ũ

「ヒイデスの導師」の例も確認しよう。ウ段長音対応箇所で ũ が用いられる箇所は以下の3箇所である。

**jūnicagiō** (十二か条) 253 - 10      **qiūmei** (糾明) 474 - 08

**nhūnan** (柔軟) 507 - 11

この例はすべて本文中で用いられたものである。「サントスのご作業」のように本文やタイトルといった用いられる環境での違いは見られない。先ほどの「サントスのご作業」の本文の例と同様の検討をすれば、この ũ が使用された丁では、他のウ段長音対応箇所に ũ が用いられている。またここにあげた語はすべて同一文献内で<sup>(註6)</sup>ˇを用いて表れ、jū が164例、qiūmei が13例、nhūnan が10例、確認できる。

この2つの点から、この^が付される丁、及び、この^が付される語に対して、何か特別な意図を持ち、ˇの代わりに^を用いたとは考えられない。この例も誤りとみるべきであらうか。

### 4. 「スピリツアル修行」の ũ

「スピリツアル修行」では、ウ段長音を示すにあたり ũ を用いた例が54例確認できる。「サントスのご作業」や「ヒイデスの導師」と比べるならば、少数の使用例とするわけにはいかない。またこの ũ は全て本文中で用いられたもので、用いられる環境に違いが見られるわけでもない。もちろん ũ もウ段長音対応箇所で用いられており、その使用数は1195例ある。ここで前節と同様の検討をすれば、ウ段長音対応箇所に ũ が用いられる語が、ũ で示された例も確認でき、語で使い分けているのでもなく、またそのウ段長音対応箇所に ũ が用いられる丁で他のウ段長音対応箇所に ũ が用いられた例も確認できる。また、ある箇所に集中的に用いられるという偏在を見せるのではなく、全体にわたって利用されている。主としてウ段長音はˇで対応させたとも言えるが、なぜこの二つの符号が併用されたのか、このままでは説明できない。<sup>(註7)</sup>

## 5. ウ段長音対応箇所になぜ複数のアセント符号が利用されたか

ここで、「スピリツアル修行」の製作が1607年だという点に注目しよう。表1で示したように、キリシタン・ローマ字文献諸本では、「サントスのご作業」「ヒイデスの導師」で用いられた  $\hat{u}$  が「天草版平家物語」から「ドチリナ・キリシタン」(1600)までの期間で一切用いられていない。この期間に制作された作品にはウ段長音対応箇所には  $\checkmark$  を付すという方針が徹底されているのである。

ただ、1603年刊行の「日葡辞書」では  $\hat{u}$  が用いられている。森田(1993)では、「日葡辞書」の見出し語について、ウ段長音を含む語は総数2054例あり、 $\ddot{u}$  は1625例、 $\hat{u}$  は80例用いられており、また、 $\ddot{u}$  もウ段長音対応箇所に349例用いられていることが指摘されている。この点で、「日葡辞書」もウ段長音対応箇所に付すアセント符号を統一していたとはいえない。ここで考えるべきは、「日葡辞書」以後では、ウ段長音対応箇所は  $\checkmark$  を付すという徹底されていた方針に変更があった可能性である。

なぜこのようにウ段長音の表記を統一しなくなったのかを考えるにあたっては、そもそもウ段長音には、オ段長音に存在するような音韻論的対立がないという点に注目する必要がある。オ段長音には合長音と開長音という音韻論的対立があるために、 $o$  の上に付す  $\hat{}$  と  $\checkmark$  の使い分けは必須であり、異なる符号をマークすることは誤りを提示することになる。だが、ウ段長音ではこのような音韻論的対立は見られない。このことより、 $u$  の上に何らかのマークを付すことが、視覚的に単なる  $u$  とは異なることを明示することにつながり、 $u$  に何らかのアセント符号を付すだけで長音表示となったのではないか。

そこで、当時このアセント符号がどのように使い分けられていたのかを考える必要がある。丸山(1988)はロドリゲスの著作のポルトガル語文に見られるアセント表記の傾向を以下のように示す。

1. アセント符号は一般に、付しても付さなくてもよいものである。
2.  $\acute{}$ ,  $\grave{}$ ,  $\hat{}$ ,  $\checkmark$  の間にははっきりとした使い分けは見られない。
3. ただし、同綴異語を区別する時には、アセント符号を利用する。

(p.73)

ここで、2に記す ' $\acute{}$ ,  $\grave{}$ ,  $\hat{}$ ,  $\checkmark$  の間にははっきりとした使い分けは見られない' という指摘に注目しよう。もちろんこの指摘はポルトガル語文にあてはまるものであり、キリシタン・ローマ字文献にそのまま適用できるわけではない。ただこの指摘



は当時のポルトガル語表記において、アセント符号にはっきりとした使い分けがなかったという条件は備わっていたことを示す。アセント符号のこのような条件のもとで、日本語のウ段長音という何の対立もない箇所では、どのようなアセント符号をマークしても、長音を明示することにつながったのではないか。

ではなぜ、わざわざほぼ統一していたと考えられた表記を、表記を統一しないという、いわばゆるい縛りへと変更したのだろうか。この点は推測に過ぎないが、時間の経過に伴い、日本語の理解を増すことで、ウ段長音には明確な対立がないため、何らかのマークをつけることで視覚的に u とは異なることを示せばよいものとなったのではないかと考えられる。

またこの表記を統一しないというゆるい縛りは、「サントスのご作業」のタイトル用のポイントにもあてはまるものと思われる。2節で述べたように「サントスのご作業」ではタイトル用のポイントの大きい活字では、この  $\sim$  を併せ持った活字がなかった可能性を指摘した。ここで、このタイトル用の活字が、アセント符号と文字が一括されたものであったか否かという議論と絡めてこの可能性を論じよう。もし一括した活字でなければ、独立した活字の  $\wedge$  を半回転させ、 $\sim$  として提示することができる。しかし、ここではその方策はとられず、 $\wedge$  が使用された。またウ段長音対応箇所のみならず、オ段開長音対応箇所にも  $\wedge$  が用いられていた。もしこの例が別々の活字であったとするならば、ここでは  $\sim$  を用いることが可能だったはずである。その箇所で、 $\wedge$  が利用されたのは、そもそもウ段長音対応箇所はどのようなアセント符号を付しても長音を明示できたためであろう。ただ、その中でもなるべくウ段長音を  $\sim$  で示そうという意識が、 $\sim$  を多用するという様相を示すことにつながったであろう。

以上のことから、「サントスのご作業」の本文、「ヒイデスの導師」「スピリツアル修行」で  $\wedge$  によってウ段長音と対応させた例も、大半は  $\sim$  でウ段長音と対応させているように見える方針においては、誤りや混用ととらえられそうではあるが、そうとは言いきれず、長音を明示する機能は果たしていたといえよう。

## 6. なぜウ段長音対応箇所に $\sim$ を用いたか

ここまでウ段長音対応箇所になぜ複数のアセント符号が付されたか、その条件について論じてきた。ここでさらに考えるべき問題がある。本稿では、丸山 (1988) の、

ˇはそもそも外国語記述のために用いられた符号であるという指摘を前提に論を進めた。しかし、ˇが外国語記述のために新たに用いられた符号であるならば、オ段長音の開合のように表記し分ける必要のある際に利用されたと考えるのは妥当であろうが、そもそも対立のないウ段長音にはまずは元々あった^が用いられると考えるのが自然ではないか。

この点について豊島（1984）はウ段長音について記す箇所の脚注で以下のように記す。

ポ語では uu は ú と鋭アセントのため (Ferreira de Véra, 32 オ)、初めはポ語表記に妥協して ü としたものであろう。(p.141)

この指摘が、ウ段長音をキリシタン・ローマ字文献の初期段階にˇで示した可能性を考える材料となろう。まず豊島は、当時の正書法上では uu = ú と解釈され、これが一般的な見方であったことを示す。ここから ú ≠ û または ú と û は対立するものであることを ú は示している。ただキリシタン・ローマ字表記においては、^ はˇと対立し用いられるため、^ ≠ ˇ ということを意味したのではないか。したがってウ段長音対応箇所に^ではなく、非常に多くのˇが使われていたと考えるのは、不思議ではないだろう。ü が用いられたのはこのような妥協によるものではないか。

## 7. ジョアン・ロドリゲスのウ段長音に対する見解

ここで、イエズス会の宣教師であるジョアン・ロドリゲス（以下、ロドリゲス）が、その著作である『小文典』において、û を用いていることについて触れよう。ロドリゲスは日本語の詳細な考察を行い、『大文典』、『小文典』を記した。その中で、ウ段長音の表記に際し、『大文典』では ü のみを用いる。しかし、『小文典』では ü を用いず û を用いる。ロドリゲスは、1620年にマカオで出版した『小文典』で、ウ段の長音の表記について以下のように記す。

長い û は uu が二つあるのに似ており、ポルトガル語の Crû, Nû, Perû, Mèrû などのごとくなる。

(池上岑夫訳 (1993) 『ロドリゲス日本語小文典 (上)』 (岩波文庫) p.71)

このように、ロドリゲスは『小文典』においてウ段長音対応箇所に^を用いる。しかし、『小文典』以前の1604年にロドリゲスが長崎で出版した『大文典』ではウ段長音対応箇所にˇを用い、以下のように記している。

これは恰も uu の二字で書かれてゐるかのやうに、引き延ばして発音するのであって、Nurū は nuruu, Cū は cuu のやうに発音する。

(土井忠生訳 (1955) 『日本大文典』 (三省堂) p.630)

このように『小文典』と『大文典』ではウ段長音対応箇所につすアセント符号が異なる。森田 (1977) は、これをウ段長音の表記の変更として以下のように記している。

これはローマ字の ü (または û, ù) で写す。『日本大文典』によれば、唇を狭めて発音する合音に属し、オ段合長音 (後述の ô) と区別して「引く ü、または、長むる ü」と呼ぶ。uu のやうに発音するもので、ポルトガル語 Perù (七面鳥) の発音と同じだという (六三〇頁)。ロドリゲスは、右の観点から『日本小文典』では統一して û に改めているが、この ü (û) は [u:] に当たると見られる。(p.273 本文縦書き)

このように『大文典』と『小文典』での ü から û への変更は、発音に即したものととらえている。ただこの変更はロドリゲスの詳細な日本語観察によるものであろうが、これをここまで考察してきたキリシタン・ローマ字文献にあてはめることができるだろうか。キリシタン・ローマ字文献におけるウ段長音をどのように示すかという方針と、1620年の時点でのロドリゲスの音韻論的解釈が同じものであったとは考えにくい。ロドリゲスのウ段長音に対する考えが û を用いた 1591 年刊行の「サントスのご作業」、1592 年刊行の「ヒイデスの導師」、1607 年刊行の「スピリツアル修行」の 3 作品に適用されていたとすることはできない。キリシタン・ローマ字文献で示された û と『小文典』で用いられる û ではまったく異なる意味を持つものであったことを指摘できよう。

## 8. まとめ

本稿では以下のことを確認した。

- ・ キリシタン・ローマ字文献ではウ段長音対応箇所に主に ü が用いられるが、「サントスのご作業」「ヒイデスの導師」「スピリツアル修行」では û も用いられる。
- ・ 「サントスのご作業」のタイトル用の大きいポイントの文字では、ウ段長音対応箇所に û が用いられた。これは ˘ が外国語記述のために用いられたアセント符号であり、「サントスのご作業」が刊行されたキリシタン・ローマ字文献

の初期段階でタイトル用の大きいポイントの ü の活字は制作されていなかったためであろう。

- ・「サントスのご作業」の本文や、「ヒイデスの導師」「スピリツアル修行」でウ段長音対応箇所用にいられた û は、主に ü が用いられる中であっては単に混用や誤りととらえられてしまう。しかし、ウ段長音にはオ段長音の開合のような対立が見られないために、^ を付すことでも長音であることを明示するマークになったととらえることができる。
- ・『小文典』で用いられた û はロドリゲスの詳細な日本語観察によって記された例であり、キリシタン・ローマ字文献で用いられた û とは異なる意味を持つ。

## 注

- (1) 日本語学の術語としての「アクセント」とは異なるので、誤解を防ぐためにポルトガル語形のアセントと呼ぶ。
- (2) 本稿ではキリシタン文献日本語ローマ字版本の文学作品全てを調査の対象とした。また、これらの作品内では û は用いられていない。
- (3) ここでいう本文とは作品の内容を記した文のことであり、タイトルとはその話に対する題目などを示すものである。キリシタン文献ローマ字日本語では、前者に比べ後者は大きなポイントの活字を用いて示される。
- (4) 富永 (1978) pp.86-87
- (5) キリシタン・ローマ字文献では õ, ô が用いられ、前者がオ段開長音を、後者がオ段合長音と対応する。また『国語学大辞典』(1980 (東京堂出版))では、「開合」について以下のように記す。

キリシタン資料や謡曲の伝書、仮名遣書の類などで、オ段の長音の口の開きの違いを中心として開合で区別する。国語音韻は、中世になってハ行転呼・音便の現象や漢字音の変化が著しくなり、「あう」「あふ」「やう」などが [ɔ:] の長母音となり、「おう」「おふ」「おほ」「えう」「えふ」「よう」などが [o:] の長母音となった。この両者の長母音の別を開合の違いといい、[ɔ:] を開音、[o:] を合音とよぶ。(p.129)

また、活字の製造について富永 (1978) では、印刷機が日本に将来される前の東洋(インドのゴア、中国南部のマカオ)においてすでに日本語対応としてこの活字が製造されていた可能性を指摘する。(p.24)

- (6) 253 丁に 2 例、474 丁に 4 例が用いられている。507 丁ではウ段長音対応箇所がこの û

の例以外にない。

(7) 「スピリツアル修行」でウ段長音対応箇所に<sup>^</sup>を用いる例は以下である。右に同一文献内でウ段長音として<sup>ˇ</sup>が付された語の用例数を示す。

|                |      |         |      |
|----------------|------|---------|------|
| ・cufû (工夫)     | 32 例 | cufû    | 42 例 |
| ・xûgiacu (執着)  | 3 例  | xûgiacu | 8 例  |
| ・cutçû (苦痛)    | 2 例  | cutçû   | 23 例 |
| ・gonhûua (ご柔和) | 2 例  | gonhûua | 28 例 |
| ・giûzai (重罪)   | 2 例  | giûzai  | 2 例  |
| ・xugiû (主従)    | 1 例  | xugiû   | 1 例  |
| ・taifû (台風)    | 1 例  | taifû   | 3 例  |
| ・cocû (虚空)     | 1 例  |         | なし   |
| ・jiyû (自由)     | 1 例  | jiyû    | 28 例 |
| ・xûfo (宗祖)     | 1 例  | xûfo    | 1 例  |
| ・giûxo (住所)    | 1 例  | giûxo   | 4 例  |
| ・chûya (昼夜)    | 1 例  | chûya   | 3 例  |
| ・giûgiû (重々)   | 1 例  | giûgiû  | 1 例  |
| ・xûqi (周期)     | 1 例  | xûqi    | 3 例  |
| ・munaxû (虚しう)  | 1 例  | munaxû  | 1 例  |
| ・xûgui (祝儀)    | 1 例  | xûgui   | 1 例  |

この例を見ていくと、cocû (虚空)の1例を除けば、残りの語はûとûが併用されてこの文献内で表れることがわかる。

(8) これは本編についての調査であり、補遺は調査の対象に入っていない。

#### [引用および参考文献]

土井忠生・森田武 (1975) 『新訂国語史要説』(修文館出版)

富永牧太 (1978) 『きりしたん版文字攷』(富永牧太先生論文集刊行会)

豊島正之 (1984) 「開合」に就て」(『国語学』136号)

丸山徹 (1988) 「キリシタン資料「開合表記」成立の背景」(南山国文論集第十二号)

森田武 (1977) 「音韻の変遷 (3)」(『岩波講座日本語 5 音韻』、岩波書店)

森田武 (1993) 『日葡辞書提要』(清文堂)

※使用テキストは、各種複製本によった。

本稿をなすに当たり、丸山徹氏より有益なご助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

(ちば・たかし/名古屋大学大学院博士課程後期)